

二〇一九年一〇月二五日

枝豆の止まらぬ旨き鞘の嵩

うつぎ

湖の色モノクロとなり冬ざる

たか子

まなかひに阿蘇五岳見ゆ秋日和

宏 虎

色変えぬ松籬とす御陵かな

はく子

二〇一九年一〇月二四日

すがれ虫雨戸半分閉めずおく

うつぎ

枝付きの丹波枝豆お裾分け

満 天

古墳から次の古墳へ秋惜しむ

菜 々

好物と言はれいそいそ栗ご飯

みづき

二〇一九年一〇月二三日

大空に鳶の輪を描く神の森

やよい

七宝にはた窯変に柿紅葉

よう子

二〇一九年一〇月二二日

峠茶屋葉つば褥に通草売る

智恵子

遠足の子らも撫でゆく力石

せいじ

柿吊るす茅葺屋根の深庇

やよい

二〇一九年一〇月二二日

嘴を熟柿で染めし盗人鴉

素 秀

甌岩へ洩れ日綾なす木の根道

菜 々

天蓋の松色変へぬ力石

せいじ

二〇一九年一〇月二〇日

高鳴りて神苑に湧く秋の水

菜 々

好物の柿を供へて夫偲ぶ

はく子

二〇一九年一〇月一九日

蟪蛄の尻あげ縋る力石

せいじ

野仏に屈めば袖にゐのこづち

うつぎ

毎日句会みのる選・二〇一九年一〇月二七日